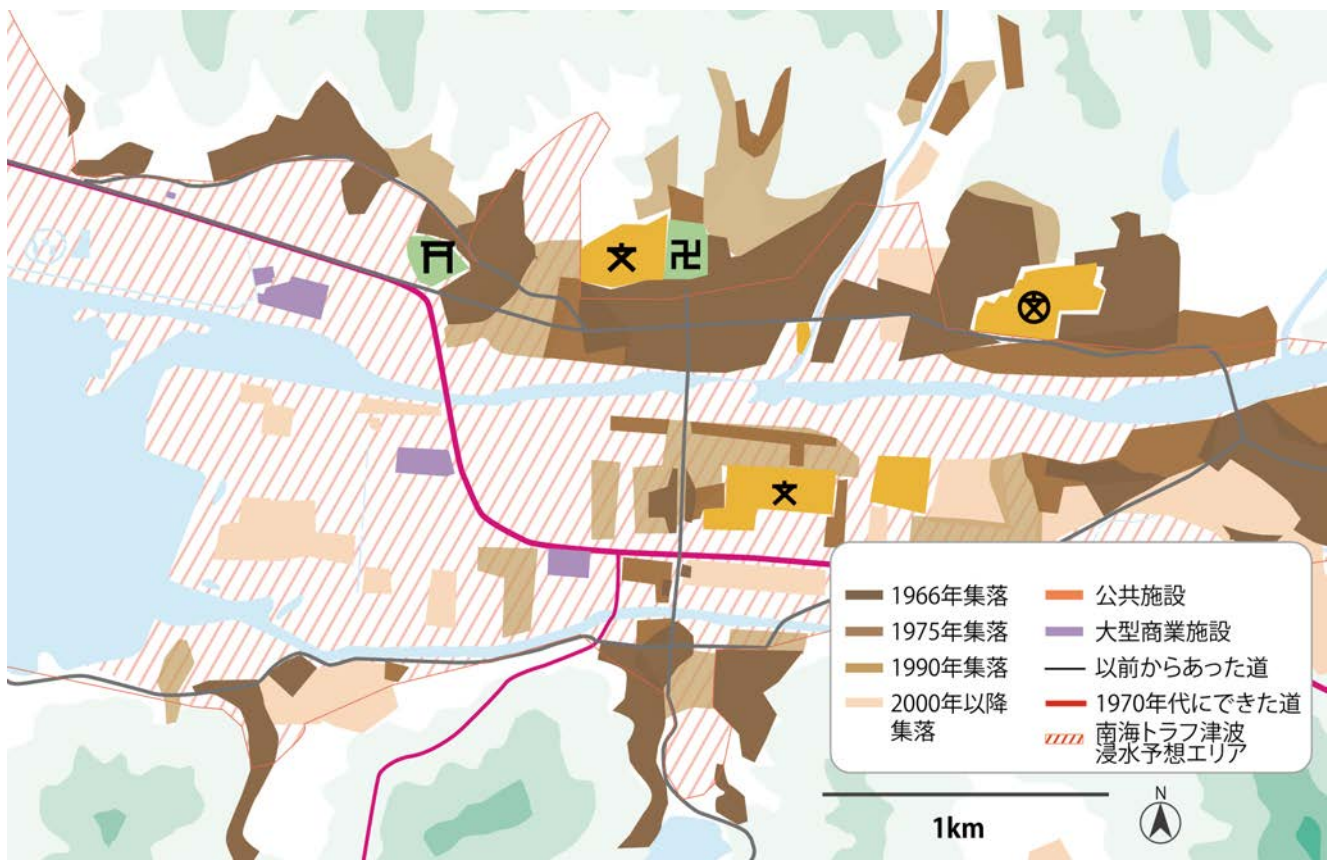


余白で紡ぐ未来への復興

東京大学大学院工学系研究科 野上宏樹 羽佐田紘之 藤江教貴 朴常豪 米澤実保



愛媛県愛南町 御荘地区

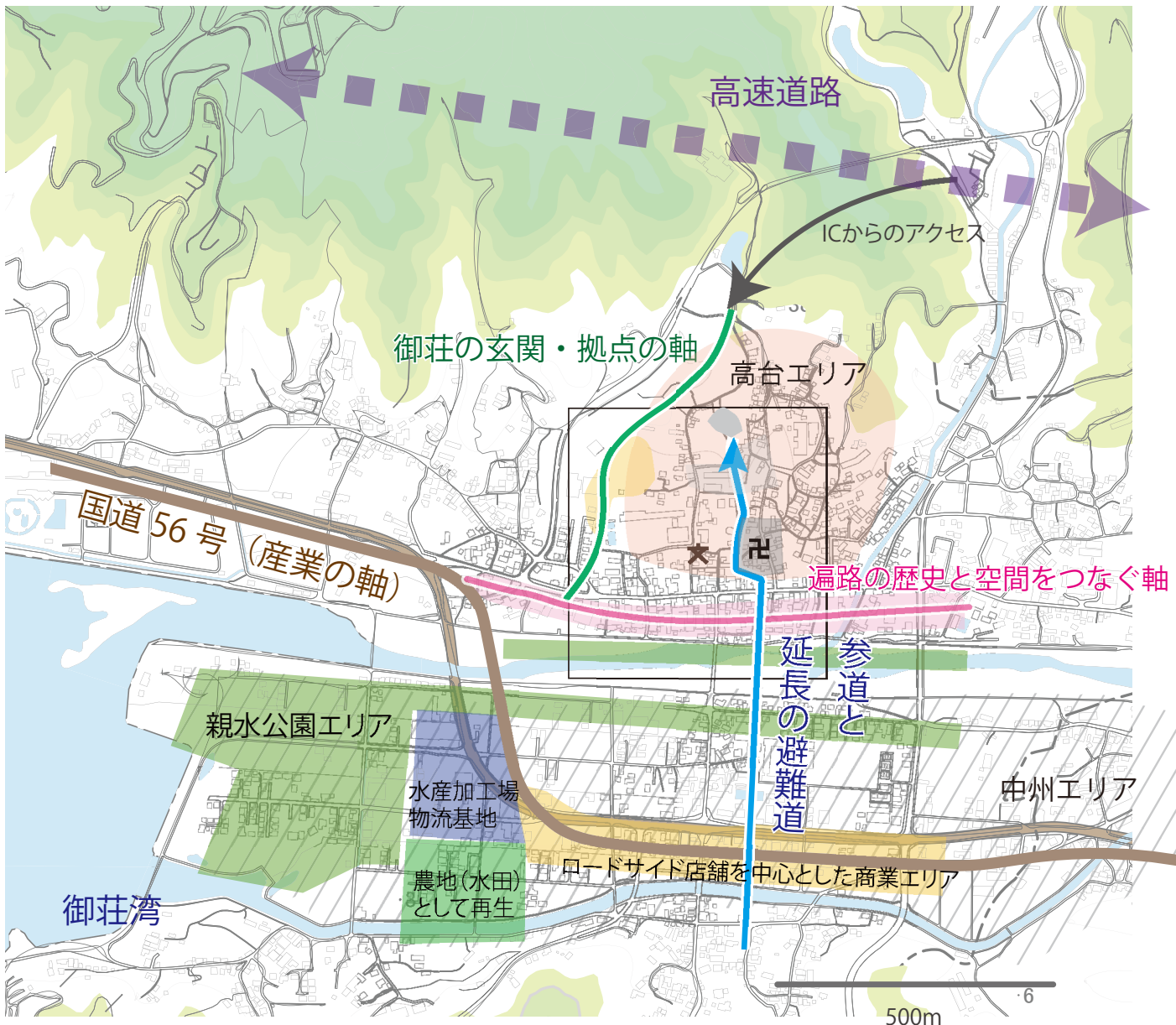


観自在寺の門前町として、山際に集落が立地する。もとは水田であった2本の川の中州部分は、1970年代の国道開通後、徐々に一部が住宅地となり、大型商業施設も立地。南海トラフ地震の津波浸水範囲と開発部が重なり、都市の発展とともに災害リスクが増大してきた。

リスクの高い中州から、山際へと都市の重心を移動

- 御荘における、インフラの軸を意識した災害に強い町の骨格づくり
- 町にある余白を生かした事前～事後復興の空間整備

軸で描く御荘都市骨格の変換



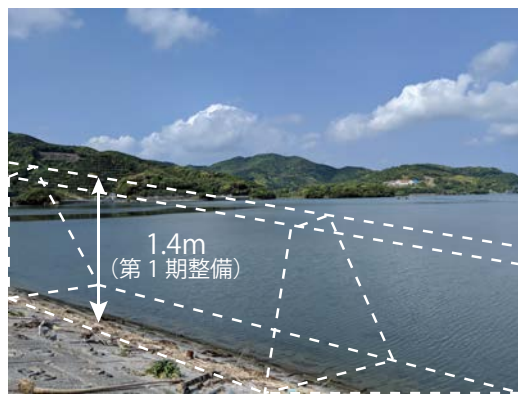
低地部の産業の軸

低地部の居住制限と高台移転

2本の川に挟まれ、津波などの災害リスクの高い低地部は土地利用に制限をかけ、高台への移転を促す。低地部は、高速道路・国道からの利便を生かして、水産加工場といった産業拠点として活用する。大規模な土地を産業用に確保するとともに、産業を集約することで産業の効率化を図る。



▲中州を走る国道は産業の軸として活用。

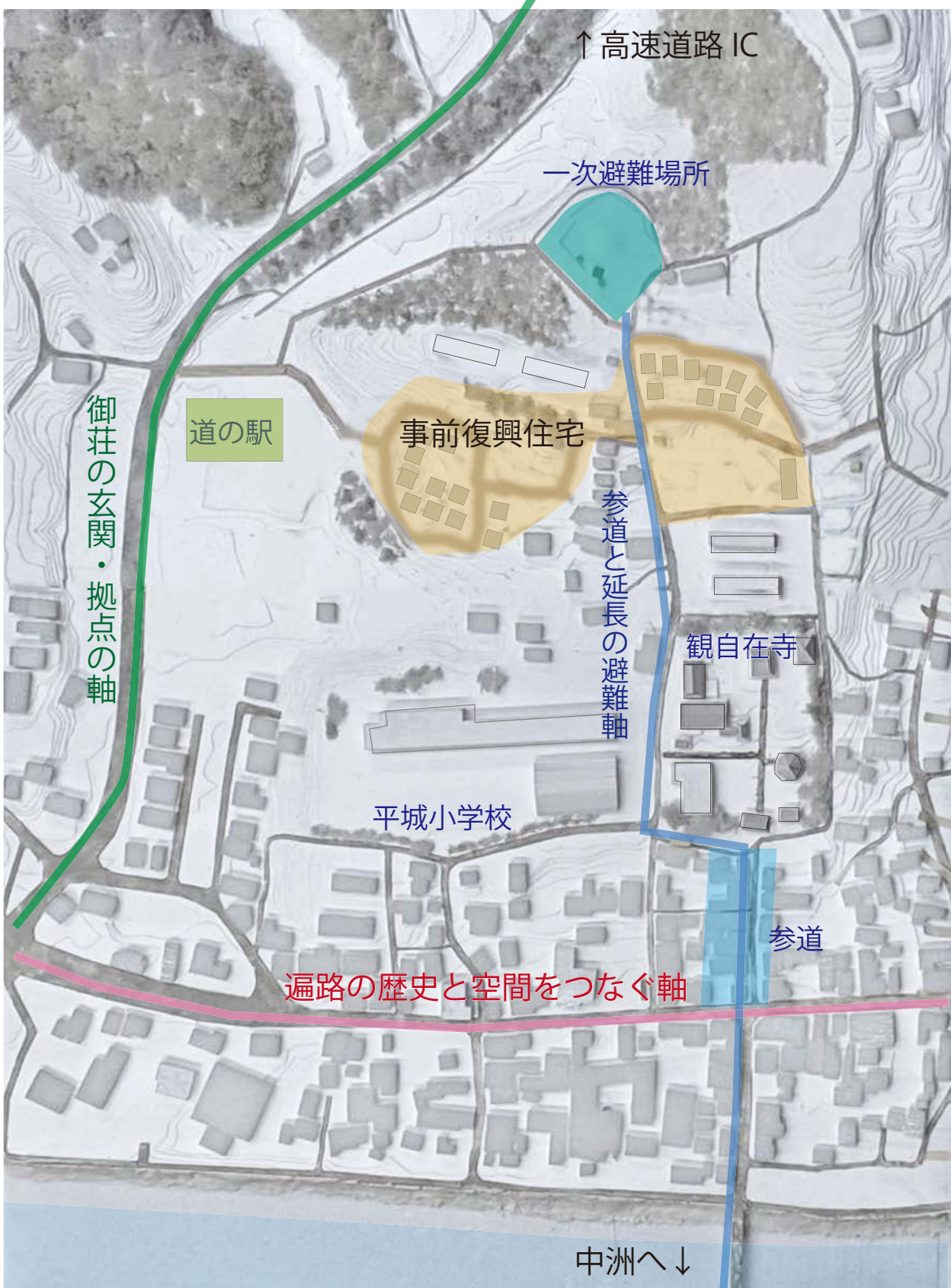
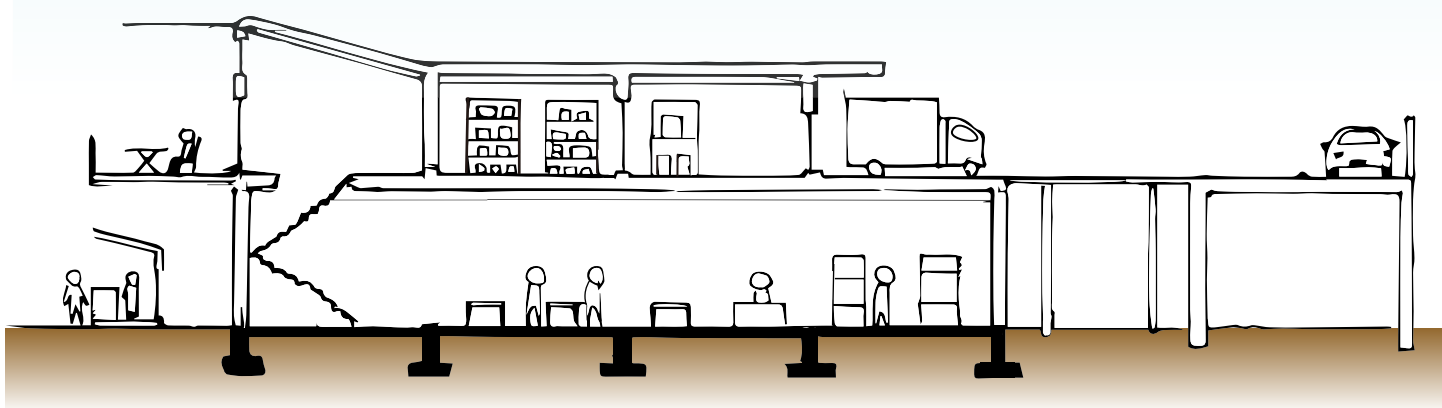


▲御荘湾に1.4mの高さの防潮堤を設置することで、低地部の中州の津波浸水を避ける。

御荘の玄関・拠点の軸

高速道路計画を生かした物流拠点

御荘ICから町中に降りてくる道に道の駅を置くことで、町の玄関としての機能を持たせる。ここに車を止め、町中へ徒歩でアクセスすることも可能に。町の玄関として、災害時には物資の拠点の役割も担う。



遍路の歴史と空間をつなぐ軸

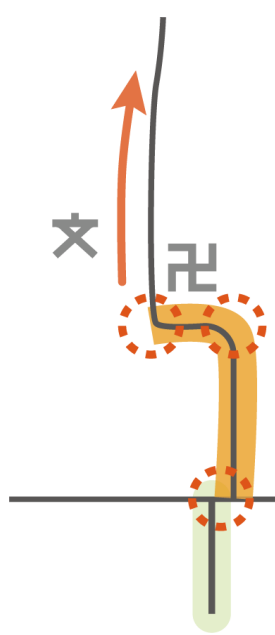
商店街の安全・快適性の向上

御荘中心部の商店街を余白を活用して歩行しやすい空間にする。商店街に面した空き地スペースを道路が染み出す形で歩行空間とすることで、遍路道としても歩きやすい・親しみやすい空間とする。



参道と延長の避難軸

避難軸整備その1



観自在寺と周辺辻・商店街との結節点へのサイン設置

四国霊場の裏関所である観自在寺・寺横の辻にあるみかん販売所は御荘のアイコンであり、高台へと続く道の入り口となる。この場所に避難所までの誘導サインを設置することによって、町の人・観光客にすでになじみのある場所から上に関心を上げるきっかけとなる



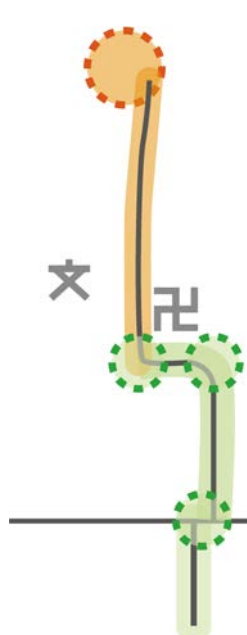
▲観自在寺参道。遍路や観光客のためのお休み処があり、人の行き来がある



▲観自在寺横のみかん屋台。人の集まる場を活かして避難軸誘導のサイン整備を行う。

一時避難場所の整備と活用

避難軸整備その2



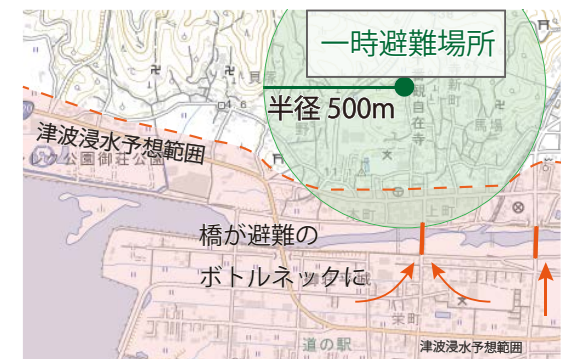
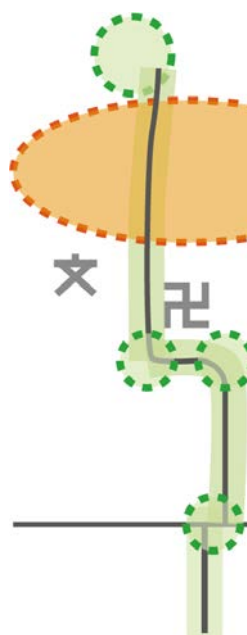
▲現在の一時避難場所



▲一時避難場所整備イメージ

山際に事前復興住宅を整備

避難軸整備その3

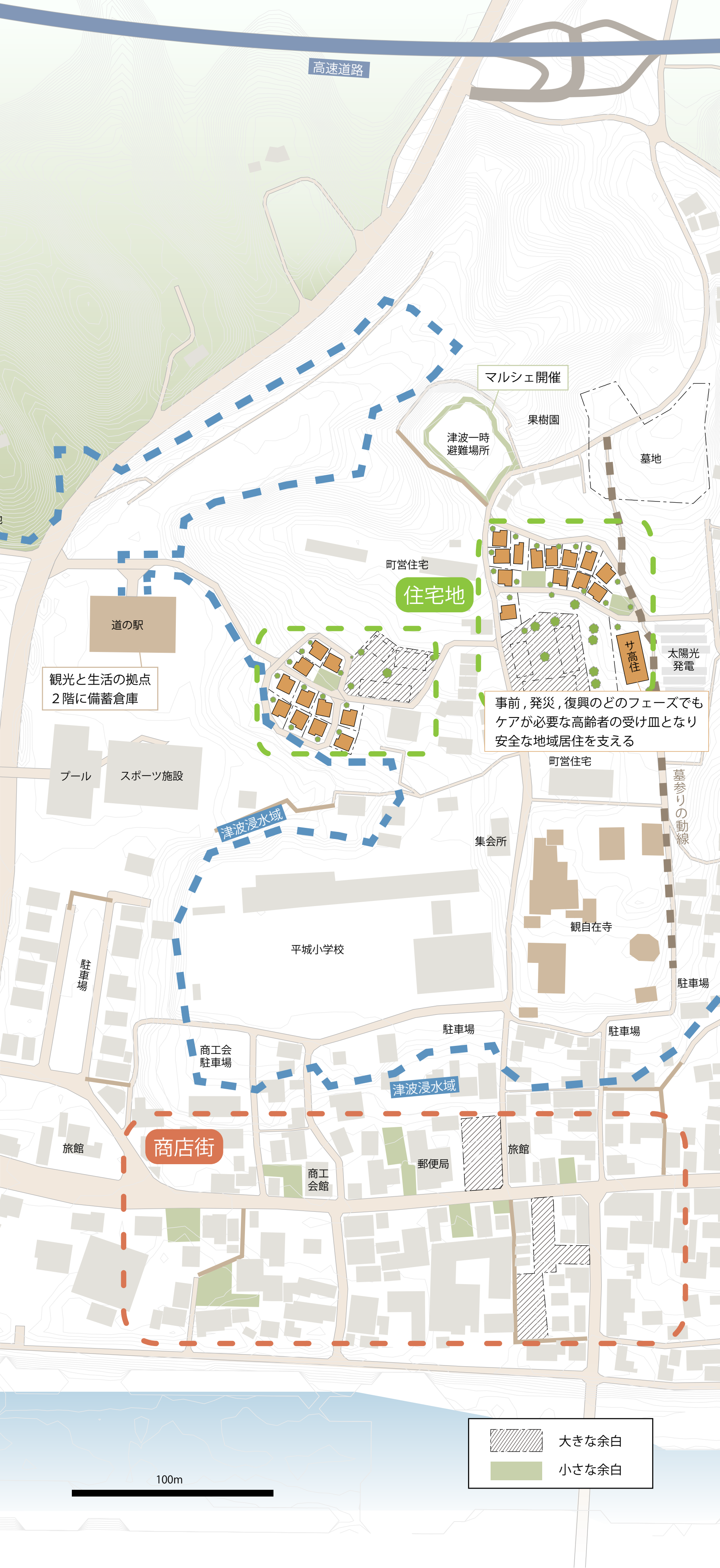


「余白」でつなぐ事前と発災、復興

従来の災害復興の課題

- ・発災時の作業の拠点の不足
- ・応急仮設住宅や災害公営住宅の用地選定・整備が発災後に行われるなど、対応の遅さに課題
- ・仮設住宅や公営住宅の立地が必ずしも居住に適しておらず、平時の生活や周辺のコミュニティとの隔絶が大きい
- ・仮設住宅ではファミリー層が比較的早期に退去する一方、高齢者の居住は長期化し、孤立への懸念

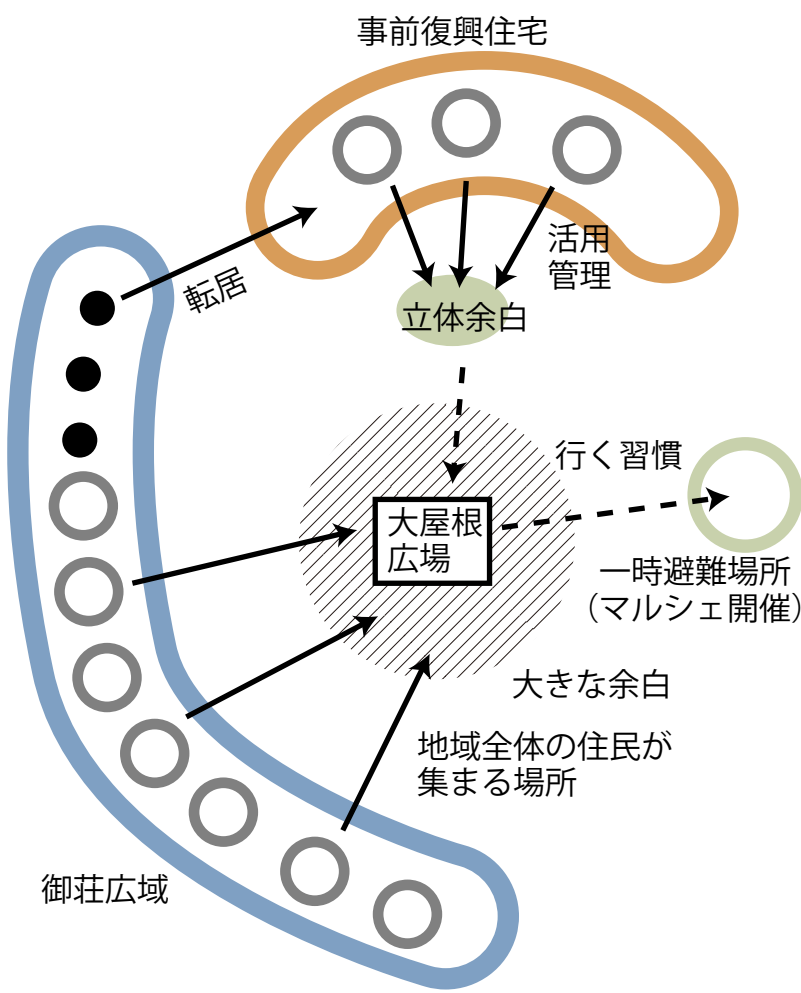
私たちは、災害時に発生する多種多様なニーズを受け入れる場所を「余白」と定義し、その「余白」の場所を、平時から活用できるようにすることで、事前→発災→復興の3段階のプロセスをシームレスにつなぐことを提案する。ここでの提案は、高台の遊休地を事前復興住宅と人工的な「余白」に区画割りする「つくる余白」と、商店街の空地を平時から「余白」として地域の魅力向上に資するものに変える「生かす余白」の2つに分けられる。いずれもその余白の大きさに応じて異なる役割が与えられるのが特徴である。



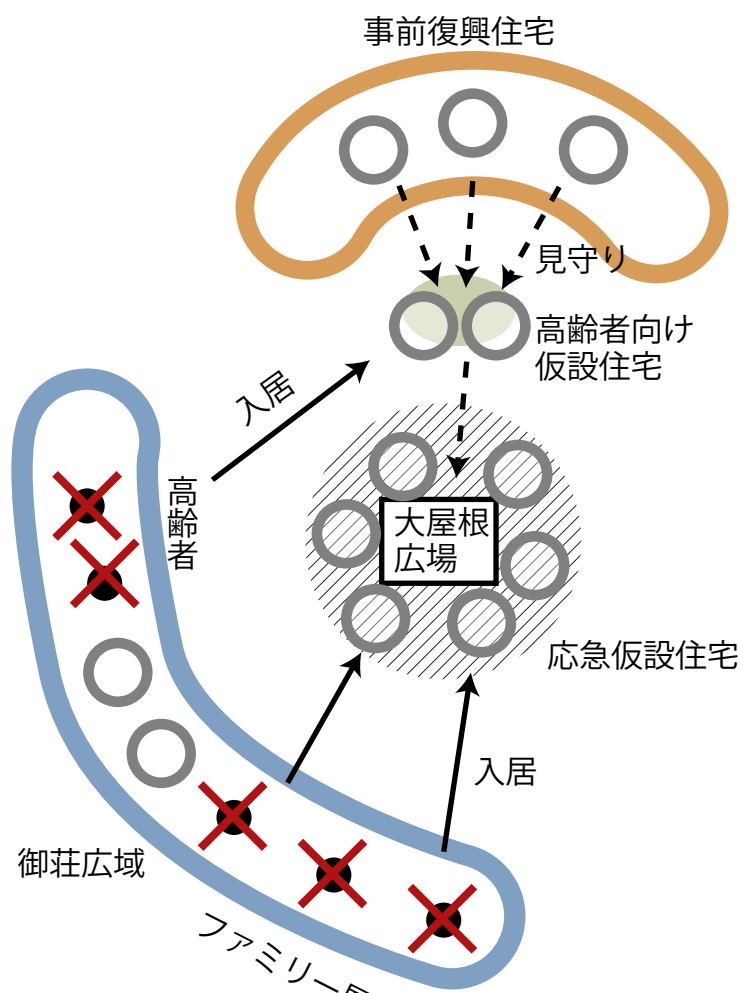
住宅地

一つくる余白

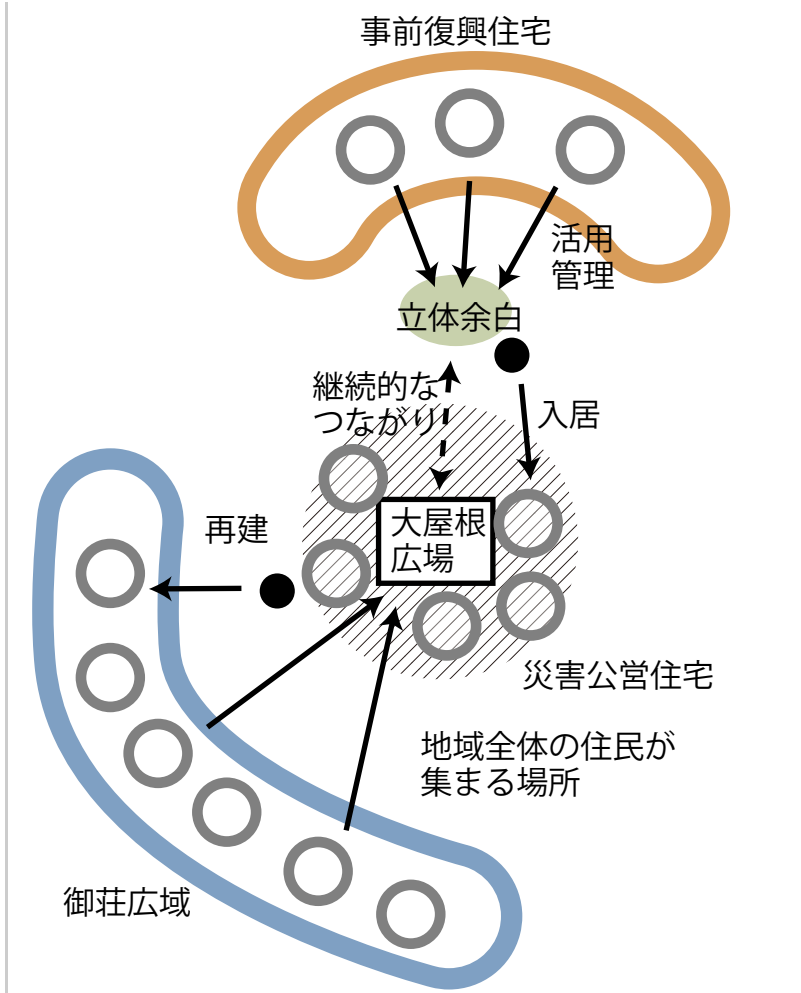
事前



発災



復興



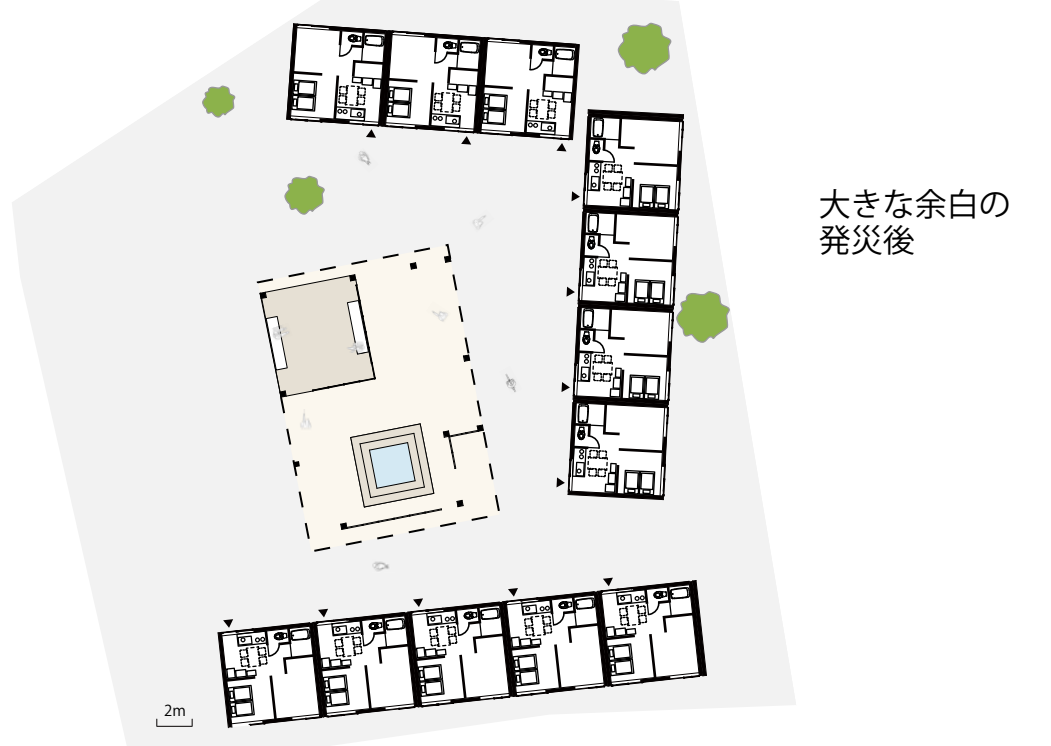
大きな余白



小さな余白



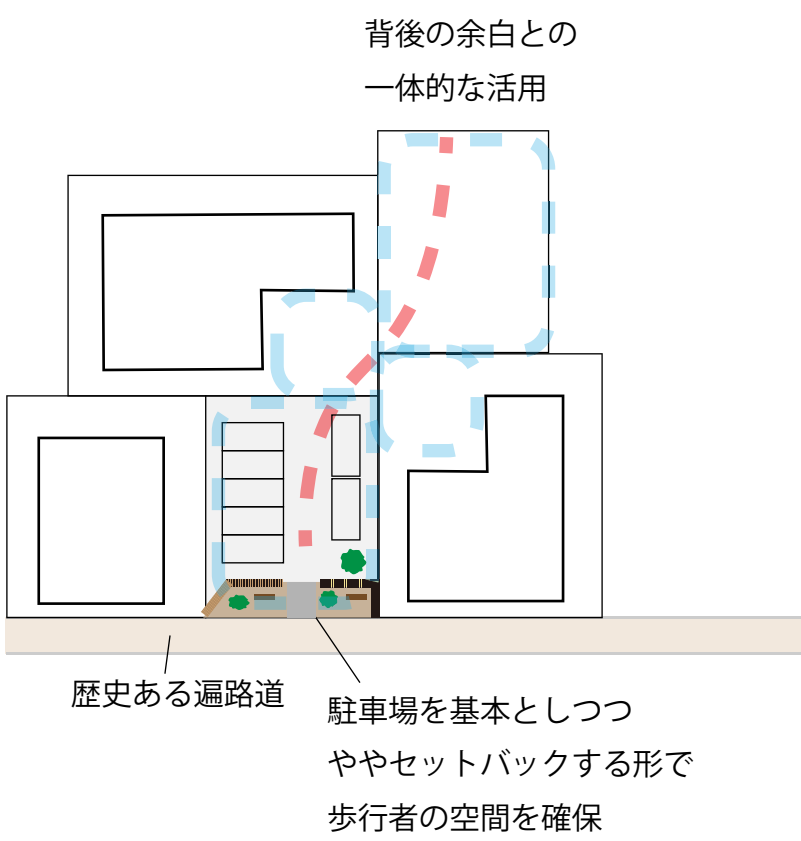
発災前からコミュニティの場を果たす立体余白



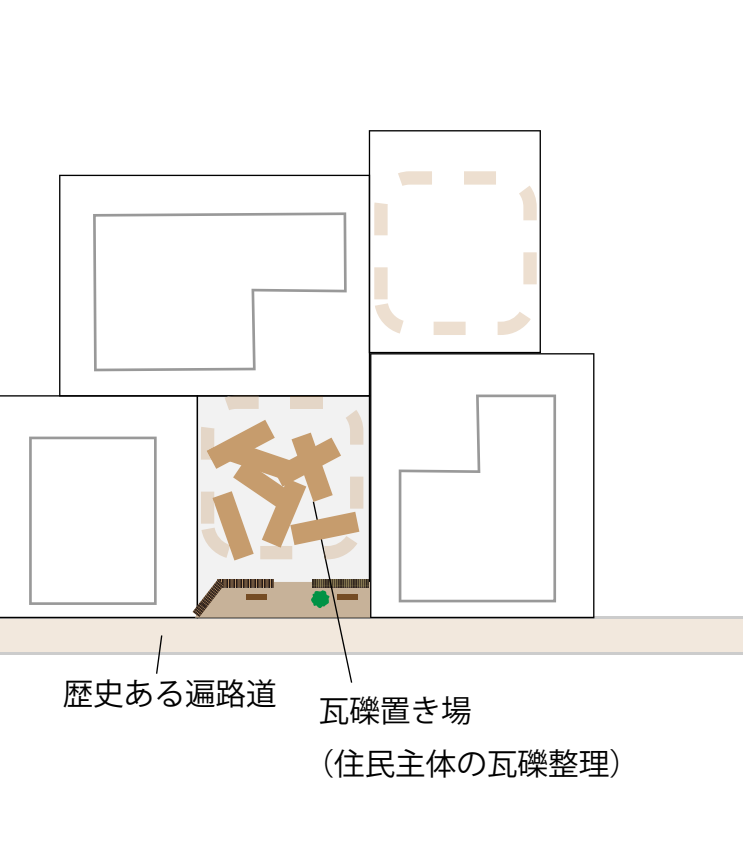
商店街

一生かす余白

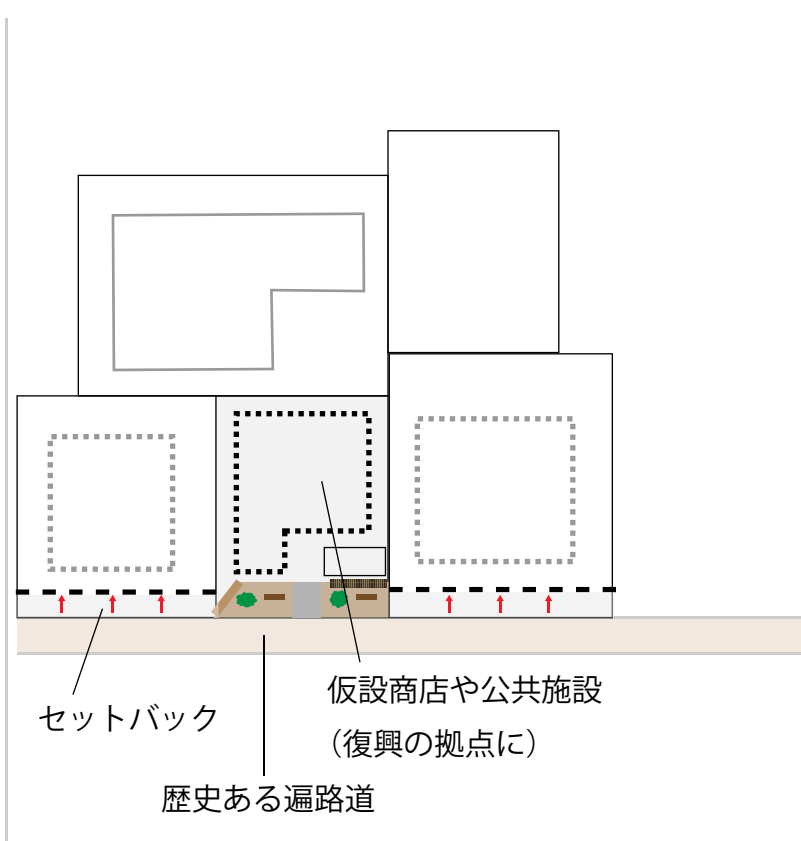
事前



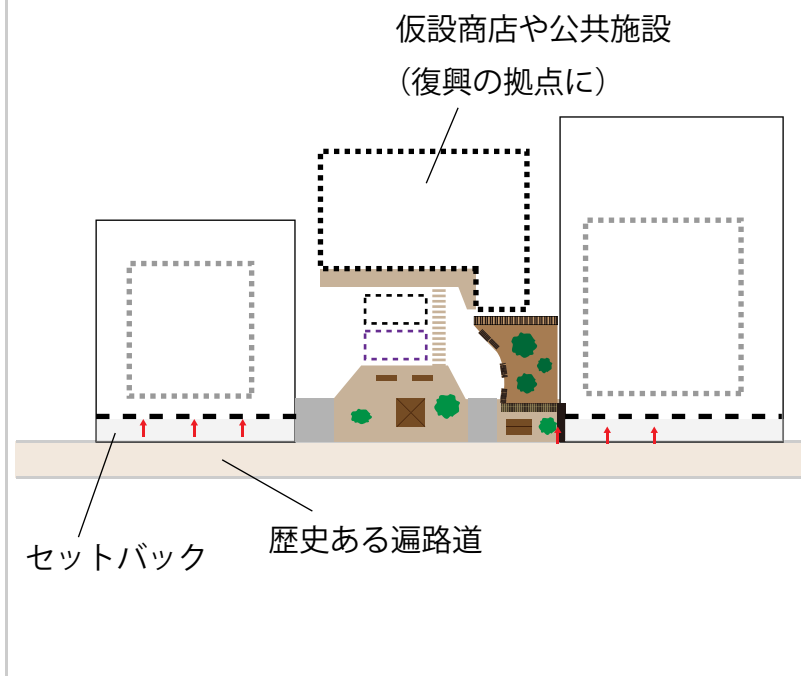
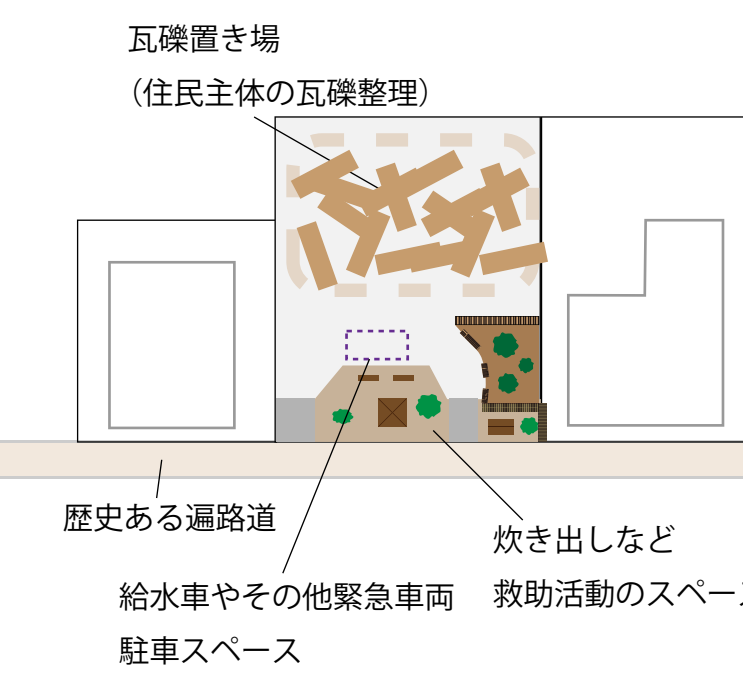
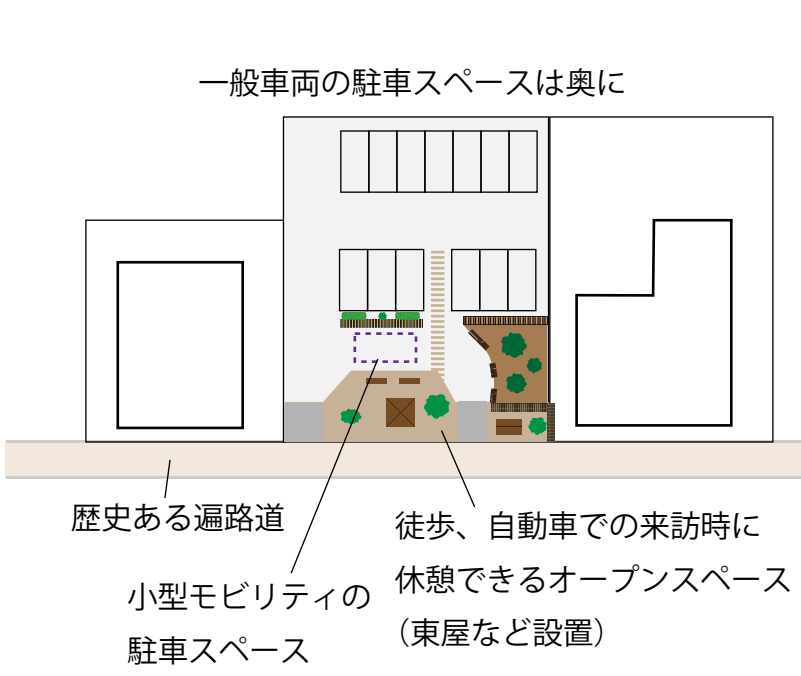
発災



復興

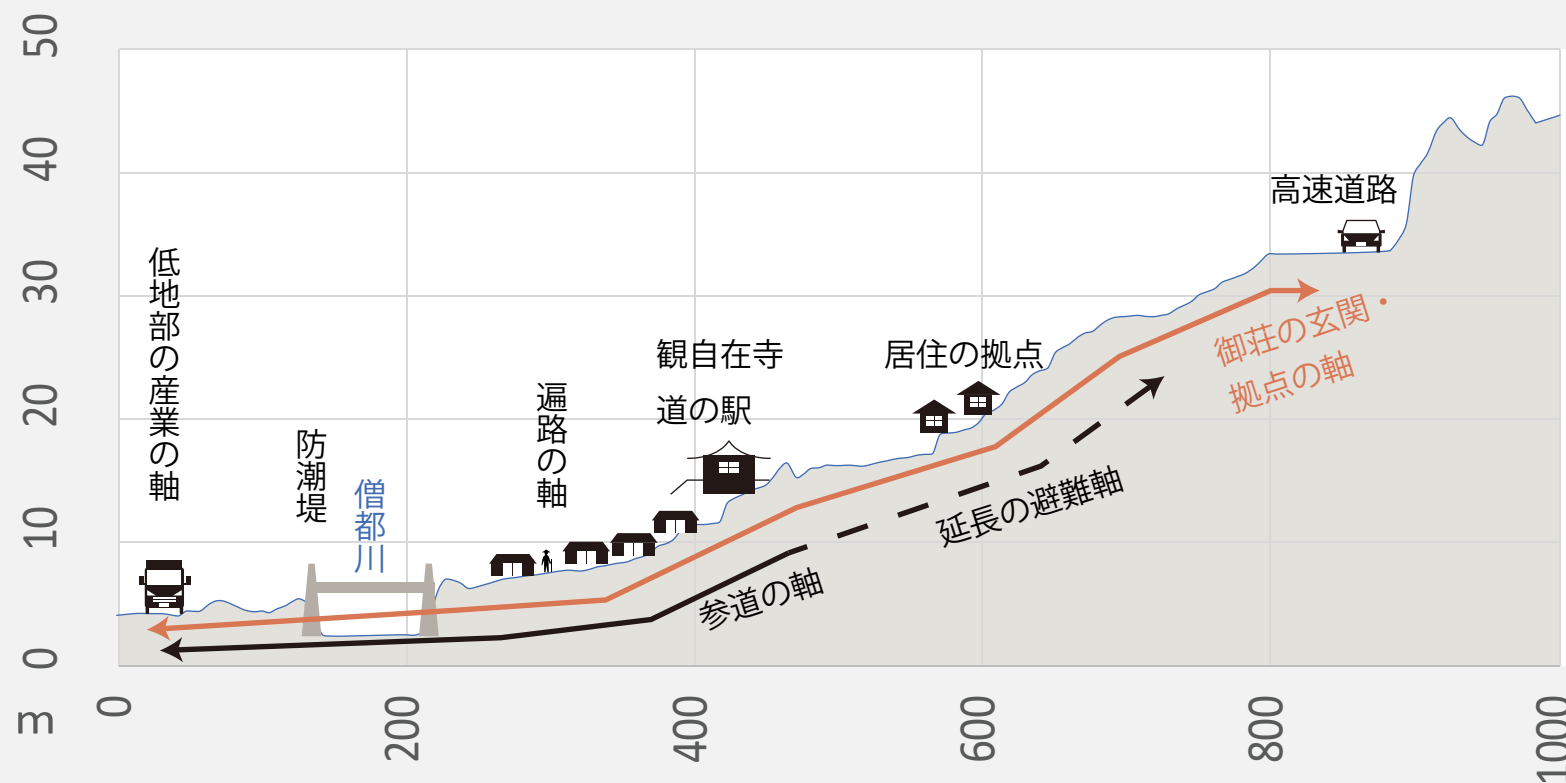
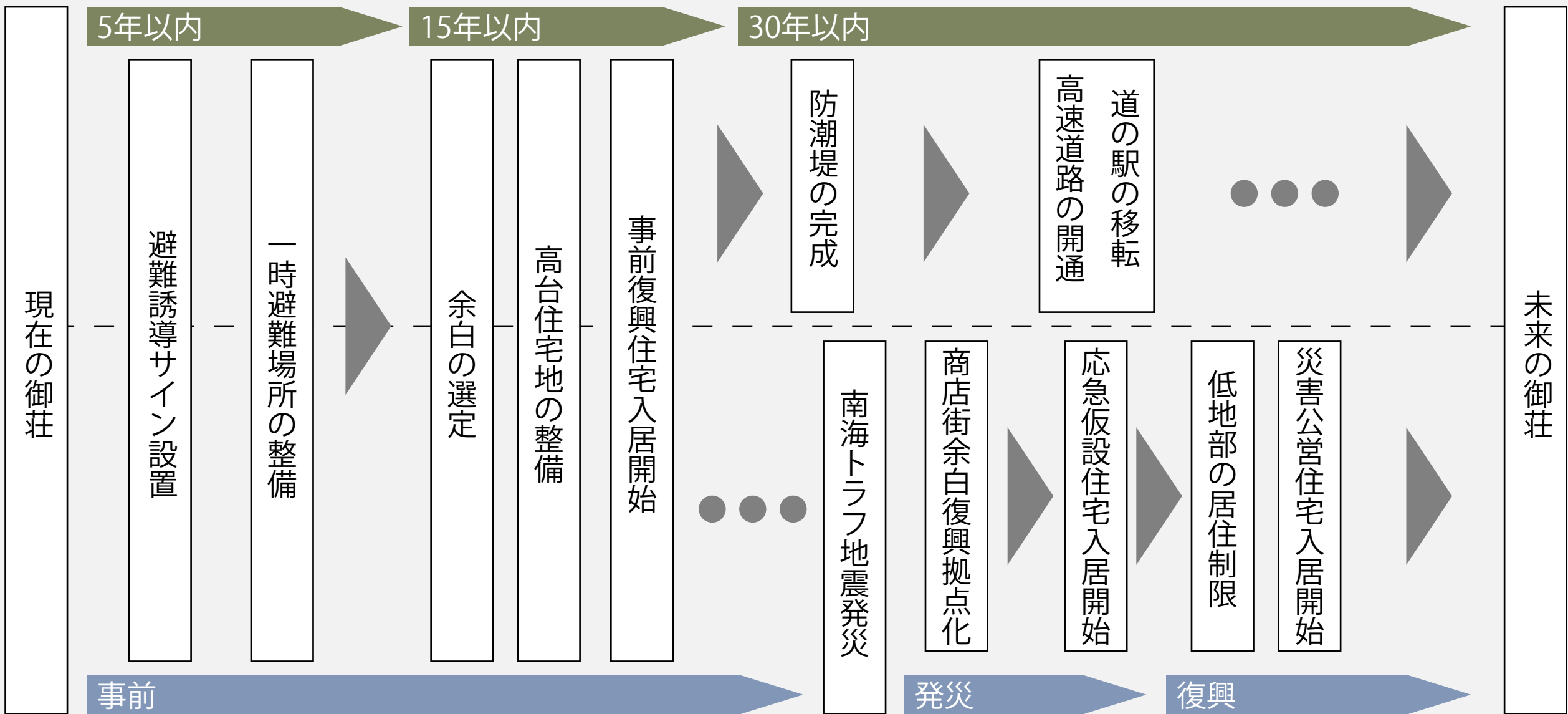


大きな余白



インフラ整備の時間軸

被災と復興の時間軸



未来の御荘の断面図

私たちは、防潮堤や高速道路などのインフラ整備と一体となって、町の軸線をリスクの低い高台へと移していくことを提案した。一方で、災害はいつ発生するかわからず、インフラ整備とは別の時間軸を考慮する必要がある。こうした不確実性を受け入れる場所として余白が機能していく。インフラ整備と被災・復興の2つの時間軸は、目指すべきゴールは同じものであるはずだ。